

# みんなのみどり

通 刊 6 号

2009.4.3

発行 みどり・山梨

事務所：山梨県甲府市古府中町984-2

(川村方)

電 話：055-252-0288

FAX：0553-33-7620

URL:<http://www.midoriyamanashi.com>

E-mail:kankyo@midoriyamanashi.com

## 勝利への道のり

- 野沢さんの笛吹市議選始末記 -

川村晃生

ともかくもいつまでも負け続けてはられない。2004年夏の中村敦夫さんの参議院議員選挙で惜敗して以後、私たちは山梨県での4度にわたる首長選挙と議員選挙において、辛酸を嘗め続けてきた。2007年夏の参議院選挙で川田龍平さんの応援をして、ようやく一矢を報いたものの、地方選挙では負け続けていた。そんな折「みどり・山梨」の仲間としていっしょに活動し続けてきた野沢今朝幸さんが、今年の10月26日に投開票予定の笛吹市議選挙に立候補することを考えていた。

3月頃から私は野沢さんに、立候補するなら早く決意してほしいとくり返し伝えてきた。準備期間は長ければ長いほどいい。だが野沢さんからのゴーサインはなかなか出ず、私や仲間たちは手をこまぬいてひたすらそれを待っていた。野沢さんの政治姿勢やその思想には十分に共感できるものがあるし、また芦川村村長としての政治実績も遠く余人の及ばぬところである。市議会議員選挙ではもったいないほどの人材だが、先立つ2007年4月の山梨県議会議員選挙に出て、残念ながら全く及ばなかった。遠回りのようだが、一つずつ階段を上っていきしかない。

野沢さんが腹を決めたのは、もう春も終わり近くの頃だった。私たちはとりあえず笛吹市で、野沢さんをまじえてシンポジウムを開くことから始めた。テーマは「農と食の安全そして地域の自立を」。講演をNPO法人「えがおつなげて」の代表理事曾根原久司さんをお願いし、

また「みどりネット信州」代表の八木聡さんにもご足労いただいて、きわめて充実した会を持つことができたが、いかんせんあまりにも人が集まらなかった。このときの私の反省は、「みどり・山梨」にはまだまだ人を動員する力がないこと、そして選挙を戦う上で主義や思想を論じてもそれだけでは人が動かないということだった。

7月31日、第一回の選対会議が開かれた。投開票日までもう三ヶ月を切っている。間に合うだろうか。とり急ぎ野沢さんのマニフェストの作成、ポスターの準備などにとりかかったが、難航したのはキャッチフレーズだった。数回の議論ののち、ようやく9月に入って「とことん市民」というキャッチフレーズに辿り着いた。野沢さんの政治姿勢を簡明に示す、分かりやすいものだった。私はこの時、このキャッチフレーズが山梨の地方都市の古い保守的な政治風土の中で、良心的市民に快いものとして受け止められるであろうことを予測した。

9月下旬に至って、野沢さんのリーフレットを笛吹市全体に手分けしてポスティングし始めた。目標は1万枚。野沢さんの政策の目玉の一つは、570万円という高額な議員報酬の引き下げだ。笛吹市民の多くは議員がそんなに多額の報酬を得ていることすら知らないのではないだろうか。ポスティングを始めてしばらく経った時、野沢さんが或る人から、共同温泉浴場に集まったご婦人がたが「そんなら今度は芦川の村長さんを上げなきゃいけないなあ」と話し

合っていたとのことを聞いてきた。それを聞いて私たちは、manifestoのポスティングが効果を発揮し始めたことを実感し励まされた。そしてその間野沢さん自身もmanifestoを持って1000戸を越える家々を訪ね、話を聞いてもらうべく努めた。

10月19日、選挙告示日を迎えた。民主党と「みどり・山梨」の共同推薦だったが、実動部隊は私たちだった。9時にポスター貼りをスタート、出陣式を行って選挙カーが走り始めた。一週間の選挙戦の開始である。それから毎日、みな手弁当で時間の都合がつく限り選挙カーに乗ったり選挙事務所に詰めたりして手伝った。中でも武藤さんは毎日朝から晩まで事務所に詰めてくれ、また時折選挙カーに乗ってマイクまで握ってくれた川部君の若い力にも励まされた。心もとなかったウグイス嬢も何とかカバーできたし、ともかく事務所の経費とmanifestoの印刷費以外はほとんど金のかからなかった選挙戦が、一週間続いた。

こうして10月26日の投開票日を迎えたが、果たして結果がどちらに転ぶか、誰一人として予測できる人はいなかった。ただ野沢さんだけは勝利を確信していたのか、落ち着いているように見受けられはしたのだが・・・。

夜9時、開票が始まった。開票所の若彦路ふれあいスポーツセンターには、須山事務局長と私が詰めた。100票、200票の段階ではほぼ一線のスタートライン上に立った。しかしそのあととなかなか票が出ない。たくさんの立候補

者の当選が決まって、次々に支援者たちが会場を後にしていく。残りの議席は3議席ほど。そして突然、11時15分から15分ごとの発表が行われなくなった。投票の無効、有効をめぐって議論が分かれたらしい。野沢姓の立候補者が他にもう一人いたことも関係していたのかもしれない。いろいろと焦燥感にかられながら、須山さんと結果を待った。この時事務所では、野沢さんだけが勝利を確信していたようだが、ようやく12時頃野沢さんの当選が決まった。ビリから二番目のブービー賞だったが、獲得投票数は1100票、笛吹市民の良識が反映した選挙だった。事務所に戻った須山さんは、野沢さんの顔を見るなり気がゆるんだのか感激したのか、床にへたり込んだ。



投開票場から戻った川村代表と野沢候補感激の握手

## リニアは夢の乗り物ってホント？

窪田 誠

JR東海は、リニア中央新幹線を単独事業として行うことを表明し、2010年代の前半には着工すると発表しました。東海道新幹線のバイパス機能をもたせるために、リニアモーターカー（通称リニア）で東京～名古屋間（東京から神奈川・山梨・長野・岐阜を經由し名古屋に

至る）を50分で結ぶという計画です。

山梨では早くも駅の誘致運動が始まっていますが、リニア新幹線がどんなものなのかは検討されていません。

このため「みどり・山梨」では2月7日、伊藤 洋山梨大学名誉教授を講師にお迎えして

『リニア学習会』を行いました。講演後の討論のなかで、住民相互の情報交換・討議などの必要性があげられ、それを受けて翌3月8日に、沿線自治体の有志による「リニア・市民ネット」が発足しました。

これまでの経緯から「リニア」には必要性はもとより、さまざまな問題があることが指摘されています。

#### (1) 建設費

JR 東海では、5.1 兆円という予算を出しています。しかし、公共事業は当初見積もり額の平均3倍かかって完成する事業といわれ、実際には15兆円以上必要になると考えられます。しかも5.1兆円という数字は15年以上も前の資材費用試算からつくられ、現在価格と大きな開き（不足額）があります。さらに、万が一建設の続行が不可能になったり、経営破綻した場合は公共交通のため税金の投入は避けられません。中間駅の建設費は地元の負担ですから、自治体の破綻も考えられます。

#### (2) 環境問題

リニア新幹線のスピードは、時速500km以上。当然カーブのない直線路線が望ましいため、南アルプス直下をトンネルで通過するルートを予定しています。しかし、ここには有名なフォッサマグナ（糸魚川～静岡断層）がありトンネル掘削となると大工事というだけでなく、水脈の変化や生態系の破壊が危ぶまれます。また、地元では世界遺産登録に向けての準備も進められており、このような環境に大きなダメージを与える工事は、世界遺産登録はおろか環境保全の面からも再考の必要がありそうです。

#### (3) エネルギー問題

リニア新幹線についての電力容量は未発表です。試算するしかありませんが、1両に100人座るとし、1列車が（16両として）32万キロワット。少なく見積もっても1日にのべ150本以上の列車が走るとすると、同時に8～9列車が動いていることになり、これには新

たに原子力発電所3基が必要です。

#### (4) 電磁波問題

JR のリニアモーターカーというのは超伝導磁気浮上式といって、簡単にいえば磁石の反発力を応用して動かすものです。とはいっても、列車のような重いものを高速で動かすのですから、私たちが想像する以上の磁力を発生させなければなりません。心臓ペースメーカーの使用者は乗れない、などの話もありますが、人体への生理的影響はいまだ不明になっています。

#### (5) 人口減少と需要問題

日本はこれから人口が減少していきます。現在の東海道新幹線の利用状況から換算した利用予測では正確さは期待出来ません。さらに重要なのは、東京～名古屋間ですから大阪へは乗り換えが必要になり利用者は激減しそうです。

#### (6) 沿線都市の衰退問題

リニア新幹線はそのスピードが売り物です。駅が多ければ、加速する間もなく減速という繰り返しで、何もメリットがなくなります。

速さ・建設コストを考えれば、中間駅は少ないほど利便性があるわけで、沿線都市に駅を設置することは矛盾します。高速移動を求める起点  
終点都市の利用者にとっては便利かもしれませんが、それ以外の都市は単なる通過都市になります。高速道路の例を引くまでもなく、沿線は衰退する可能性が高いのです。

以上、問題点を6つに分けて取り上げました。これらの問題が解決されなければ、私たちや未来世代にとって大きな負担、マイナスになってしまいます。

「みどり・山梨」では多くの人たちに議論していただき、リニア新幹線をどのようにすべきかいっしょに考えていこうと思っています。

# グリーンレター 1

## 沢を歩きながら考えたこと

みどり山梨会員 赤荻雅己

3月の中旬、南アルプスの池口川へ沢歩きに行ってきました。今年は暖冬で沢筋にはほとんど残雪が無く、例年、ヒヤリとするゴルジュも楽に通過できた。この川は南アルプスの聖岳を水源とする遠山川の支流で、再び話題になりそうなりニア新幹線のトンネル予定地のすぐ近くを流れる川だ。この流域は「山が遠いで遠山川」の言葉通り、山と森が深く、生き物の宝庫でもあるが、反面、フォッサマグマと中央構造線に囲まれた山域で地盤が極めて脆く、定期的に大きな山抜け（大崩壊）を起こしていることでも有名だ。ナイフで山の尾根を切り落としたような大崩壊である。この山域にリニアのトンネル？疑問を持たずにはいられない。また、尾根を越えた反対側は大井川の源流である。この流域は電源開発と森林伐採でかつての面影は無く、無残な姿になっている。さらにこの真下にトンネルを掘るのだろうか。

「リニア新幹線」は環境破壊のほか、そもそもの必要性、技術的課題、電磁波の影響など、様々な問題があることが指摘されているようだ。財政上の問題は極めて深刻になりそうで、その付けは結局私たちにかかってくるのかもしれない。また、運行に際して莫大な電力を必要とするらしいが、どこからその電力を引いてくるのだろうか。柏崎刈羽原発の事故の記憶も新しいが、リニアの推進は原発とつながることも視野に入れておきたいものだ。

山や森は誰のものなのか。それは国家や企業ではなく、地域の共有財産であったはずだ。今日ではいたるところで民営化の名のもとに共同的な財やサービスの私物化が進んでいる。今日の格差、貧困の問題も案外、この私物化に原因があるのかもしれない。

いろいろなことを考えながら、のんびり沢を歩いた。相変わらず森は豊かで、1年ぶりのアマゴも変わらず美しい姿だった。

### 自己紹介

一年前、神奈川の県立高校を退職。山小屋をやろうと思っていましたが、二転三転、この四月から年を顧みず都内の大学院で学ぶことに。みどりには今年一月から入会。石原英次さんとの出会いがきっかけです。山梨の自然が好きで、奥秩父の山や谷は何度も訪れました。韮崎市穂坂町在住。

# とことん市民・野沢今朝幸の 笛吹市議会レポート

## 主な議会活動 <H20 12月定例議会>

### 一般質問 2件

- (1) 議会活動の実態から見て、支給されている議員報酬は妥当か。(活動に比べ高額すぎる実態を示し改革を促す)
- (2) 芦川中学校を存続させる施策を検討する用意はあるか。(何の施策もやっていない実態を指摘し、小規模特認校の採用を検討するよう促す)

### 提出案件(議案の提出)

「乳幼児医療費助成金支給条例の改正案」(満6歳までの医療費助成一無料化を12歳まで引き上げようとするもの)

## <H2 1.1.9日全員協議会>

市税滞納議員2名に対し、その常習性ゆえに悪質であることを強く指弾。

## <H2 1.第1回臨時議会>

全員協議会において、野沢(勝利)副議長と宝委員長の辞退に伴う、議員の委員会変更と委員長人事に異議を唱える。

## <H2 1、3月定例議会>

### 一般質問 2件

- (1) 特別職の給与減額について。(経済危機下の市民とともに痛みを分かち合うため、市長、議員の給与を当分の間減額しようとするもの)
- (2) 再び芦川中学校の存続問題について。(基本に立ち返って、廃校の本当の目的とそこから得られるメリットがあるかどうかを質す)

### 反対討論

H2 1年度一般会計予算に反対する立場で発言。(当予算には、市民の主権在民の権利を根本から崩しかねない投票所の削減案 現在の40か所から30か所へーが含まれており、到底賛成できるものではないというもの)

## 議会・議員の実態(その1)

笛吹市議会議員になってからまだ5ヶ月ほどしか経ってはいないが、聞いてはいたがそれにしても市議会とはこんなにも常識では考えられないところかと、改めて驚いている。

私たちにとってとても大切な条例や予算、そして人事がどのような思考と力学で決められていくのか、その辺の実態を今後数回にわたって実写していくことにする。

## 大会派が幅を利かす議会

昨年10月の臨時議会は、選挙後の初議会とあって、議長・副議長・常任委員会の委員長等のポストをめぐる人事案件が中心となった。臨時議会開催時の会派構成は、正鶴会と笛政クラブがともに7人で最大大会派、続いて3人の新和会と公明党、2人の共産党と私の所属する改革市民派クラブであった。

普通ならば、最大会派を中心に議長ポストをめぐって熾烈な闘いを繰り広げるはずだが、全く無風。結果は最大会派2派が議長、副議長ポストを分け合い、そして常任委員会を含め5つある委員会の委員長ポストを議長会派が2つ副議長会派が3つと独占し、すばらしく美しい均等配分となった。

情報通のK議員によると、最大会派2会派だけで、すべて水面下で決めてしまって、小会派など口を挟む余地はないとのこと。K議員は加えて、2年後には議長会派と副議長会派が入れ替わることで話が済んでいるとのこと。

今年の1月に発覚した市税滞納でその役職を辞任した副議長と常任委員長の空きポストをめぐっても2大会派がここまで考えるかというような、言ってみれば「曲芸」でしっかりポストを守った。本来なら、辞任した副議長と常任委員長に代わってそのポストだけ新しい議員に代えればいいところを、何と2大会派だけで副議長、委員会委員長を独占するために、各委員会の構成まで変え、関係のない委員会の委員長まで代えてポストを死守したのである。

問題は、誰が議長に相応しいか、また副議長に、委員長に相応しいかという議論が全くなされないところにある。議会とはまず議論するところであったはずだが……

ところで、そもそも会派って何か？ 地方自治法に「会派」という用語がはじめて登場したのは、平成12年の政務調査費の法制化に伴ってである。「会派または議員に対し、政務調査費を交付できる」という条項においてであり、それ以外には会派という用語は使われていない。つまり、会派とは地方自治法上は政務調査費の交付を受けることのできる単なる任意団体でしかないわけである。

しかしながら、この単なる任意団体である会派が、議会運営上のもっとも大きな要素として、議会の仕掛けが作られてきている。これは、多少の違いはあるにしても全国のほとんどの市町村議会においてみてとれることである。

とりわけ、議会のあり方を実質的に規定してしまう議会運営委員会の委員数の按分、そしてもっとも議会で重要な一般質問、代表質問の質問時間の割り当てが、会派の所属議員数によって割増しを受ける形で決まる仕掛けとなっている点がポイントである。

笛吹市議会では、議員の14/24を占めている大会派が、議会運営委員会の委員では8/11を占め、ほぼ独占している。また会派を組んでいれば、質問時間は「会派所属議員数×10分」がそれぞれの会派にプラスされ、議場は大会派の独壇場と化している。

少数派を排除して、執行当局の提出する議事案件をスムーズに通過させることが大会派の使命である。その使命を果たすことによって市長の影響力をもち、所属議員の個別の施策……多くは土木工事……を実現していくという構図となっている。

いま笛吹市議会の2大会派は、2人会派も会派とは認めない方向で議論を進めている。そうすれば8/24の議員は排除されることになる。これが実態である。

## 編集後記

「みんなのみどり」が装いを改めて発行されることになった。少しく休刊していたのは、編集に携わってくれていたH氏が多忙を極めていたためで、ようやく新たな体制を整えることができた。

4月、7月、10月、1月のクオーターリーで、それぞれ川村、野沢、須山・武藤、窪田（誠）が編集責任者である。遅延や休刊があったらこれらの方々を叱咤していただきたい。また今号から、「グリーンレター」という欄を設け、会員やサポーター、その他の関係者の声を載せさせていただくことにした。今回は新入会員の赤荻さんにご執筆を願ったが、次号以下会員の意見交換という意味もふくめて、皆さんに書いていただきたいので、どうぞよろしく願います。